キズナエピソード

及川依子　6話

//ADV形式開始

//アイドルフェス会場・舞台裏

［］

アイドルフェス当日

フェス会場の舞台裏

［依子］

（とうとう、この時が……）

［後輩アイドル］

「先輩、忘れてませんよねぇー？

どっちがアイドルとして優秀か、

このフェスでハッキリさせるってこと」

［後輩アイドル］

「ライブが終わった後が楽しみですぅ。

先輩はどんな顔になってるんだろっ。」

［後輩アイドル］

「お口あんぐり開けて

『そ、そんなバカな……ワシの完敗じゃあ』

とか言っちゃってたりして！」

//暗転

［］

ライブ後。

［後輩アイドル］

「そ、そんなバカな……」

［マネージャー］

「なにをそんな絶望的な顔してるの？

ライブは大成功よ。この大歓声が聞こえないの？」

［後輩アイドル］

「大歓声……って、

これほとんど依子先輩へのコールじゃない！」

［マネージャー］

「そうね。今まで見た中で、最高だったわ。

依子。もう少しでMCだから、挨拶してきなさい」

［依子］

「……うん」

//暗転

//アイドルフェス会場・ステージ

［依子］

「みなさーん、こんにちはー！

盛り上がってるー？」

［ファンの声］

「いぇーい！

依子ちゃん、良かったよー！」

［依子］

「ありがとー！　イコもとっても楽しかった！

……あのね、今日はみんなに謝りたいことがあるの！

この前は、お騒がせしちゃってごめん！」

［依子］

「イコの心が弱かったせいで、

軽はずみなことしちゃって……。

みんなに心配かけちゃった……」

［依子］

（ウチが愚痴ばっか言わんで、一人でしっかり出来とったら、とびおを巻き込まずにすんだんじゃし……

ごめん、とびお……）

［依子］

「ごめん……イコのワガママで振り回しちゃって……。

都合のいいことだと……思ってるけど……。

もしまだ応援してくれるなら……これからもイコのこと――」

［依子］

（……違う。ウチ、とびおが居たけん東京でも頑張れたんじゃわ。

ウチに巻き込まれとっても、とびおはカバチたれたりせんかった……。

それなのにウチ……）

［依子］

「だから……これからも……うぅ……ぐすっ。

イコのこと……ひっく……」

［依子］

（だめ……うちにはやっぱり……とびおのことが……）

［？？？］

「依子ー、がんばれー！」

//↑とびお

［依子］

「えっ!?」

［ファンの声］

「そうだー、がんばれー！」

「イコたーん。負けないでー！」

「俺達、待ってたぞー！」

=========================スチルカットシーンB開始=========================

［依子］

「みんな……！」

［依子］

（……そうじゃわ！

ウチが胸を張らんでどうするんよ！）

［依子］

「みんな、ありがとう！

イコも戻ってこられて本当に良かった！

これからもよろしくー！」

=========================スチルカットシーンB終了=========================

//暗転

//舞台裏

［マネージャー］

「依子、お疲れ様ー、よかったわよー！

この後の打ち上げ――」

［依子］

「ごめん、用事ができたから、イコ、先に帰るね！」

［後輩アイドル］

「……私の完敗だわぁ。」

//暗転

//人気のない公園・夜

［とびお］

俺は一人、ブランコを漕いでいた。

依子との日々を思い出し、たそがれる。

それが日課みたいなものになってしまっていた。

［依子］

「……やっぱり、ここにいた」

［とびお］

その時、ずっと聞いてきた声が聞こえた。

［とびお］

「依子……なんでここに？」

［依子］

「それはこっちのセリフじゃ！

フェスに来てくれてたのに、

なんで逃げるように帰るんじゃ！」

［とびお］

「なんでバレたんだ……？　顔は隠してたのに……」

［依子］

「なんでもなにも……ウチが言葉に詰まったとき、

最初に声をかけてくれたんは、とびおじゃろが！」

［依子］

「わかるわ！　ずっと聞いてきた声じゃけん。

じゃけど、なんで来てくれたん？

ウチ、とびおのことフったのに……」

［とびお］

「その答えなら、もう言っただろ？

『依子、がんばれー』って」

［とびお］

「依子、前に言ったよな。側にいるだけでいい、って。

俺もだよ。友達だろうが恋人だろうが関係ない。

依子の力になりたかったんだ」

［依子」

「とびお……」

［とびお］

依子の目からポロポロと涙が溢れ出した。

彼女はそのまま俺のところまで走ってくる。

そして――

［依子］

「とびお！　んむっ、んちゅっ……」

［とびお］

勢いのままに抱きつき、キスをした。

［とびお］

「お、おい！

見つかったら、また大変なことになるぞ!?」

［依子］

「ええんじゃ。もう自分の気持ちに嘘はつけん。

ウチにはとびおのことが、どうしても必要じゃけん。

必要な体にされてしまったけん。責任とりぃや！」

［とびお］

「……一緒にいても、いいのか？」

［依子］

「当然じゃ！

ウチはもう、何があっても絶対に止まらんけん。

だから、ずーっと側にいてくれん？」

［とびお］

懇願するように覗き込んでくる依子

俺は少し笑ってから彼女を抱きしめ、口付ける。

今度は深く。離れないように。

//【R18版の場合、ここに挿入】

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

//白い部屋

そこで意識が覚醒した。

「……あんな可能性もあったのかもしれない」

俺はひとりごちて、白い壁を眺める。

大きなスクリーンに、依子との思い出を幻視する。

//次ページ

アイドルとしてファンを楽しませる依子。

日頃の鬱憤を愚痴にして吐き出す依子。

夢のために、自分に厳しくする依子。

そして、一人の女の子としてそばにいてくれた依子。

……そのどれもが愛しかった。

//次ページ

自然と胸の奥から気持ちが沸き起こってくる。

依子を守りたい。

俺は心にそう誓った。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//6話END